

読者のコーナー

広域ごみ処理問題 市民の理解の場を

南房総市の千倉保健センターで、3市1町のごみを1か所に集めて処理する、広域ごみ処理事業についての学習会・講演会がありました。

講師は元長野大学教員の関口鉄夫さんで、約140人の市民が参加しました。講演後には多くの質問が出され、活発な意見交換もありました。広域ごみ処理問題を考えるうえで、最良の機会だったと思います。

汚染物質の排出を規制する環境基準があります。個々の汚染物質が基準内であっても、汚染物質同士が影響し合い、相乗的な能力となる複合汚染が問題だといえます。汚染による影響は微生物に始まり、昆虫、鳥類、植物、獣類、そして人間へと広がり、胎児、子ども、年配者をもっとも影響を受けやすいといえます。

1800度の大きな問題点は、稼働と停止を繰り返すたびに、炉体の部材によって1000度以上の温度差が生じ、炉体が不均等な伸び縮みを繰り返して、破壊事故が多くなることです。

関口さんはごみ処理の核心を「燃やすごみを徹底的に減らすこと」と提案しています。知恵と工夫で家庭から出るごみを減らさせ、分別し、リサイクルし、燃やすごみを徹底的に減らすことが大切です。燃やすごみが減れば、汚染物質の発生量も少なくなり、処理施設の規模も小さくできます。

「このような環境に配慮したごみ処理の仕組みは、未来の世代への最高の贈り物になるでしょう」と、関口さんは熱く語ります。

このように環境に配慮したごみ処理の仕組みが互いに質問し、討議できるような場を各地域で設けてもらいたいと思えます。

安房広域市町村圏事務組合と3市1町には、今回のような学習会や講演会、市民と行政・専門家が互いに質問し、討議できるような場を各地域で設けてもらいたいと思えます。

鴨川市 五十嵐富士弥

読者のコーナー

ごみ削減徹底し 計画の見直しを

安房3市1町では現在、広域ごみ処理として南房総市千倉町大西区グ

リーディング沿いの山間地に、焼却場と最終処分場を計画している。この地域の焼却場はどれも老朽化しており、すでに稼働を取りやめ外部に処理を委託している地域もある現状であり、焼却場の建設は必要に迫られたものであるのは理解できる。

しかし、今回の計画を調べてみると、疑問や懸念が多数見つかる。そのひとつがこの計画に焼却されるごみの削減、減量化が全くと言ってよいほど入っていないことである。

横浜市では、紙ごみ、プラスチックごみなど、1800度の大きな問題点は、稼働と停止を繰り返すたびに、炉体の部材によって1000度以上の温度差が生じ、炉体が不均等な伸び縮みを繰り返して、破壊事故が多くなることです。

2015.9.13 房日

報で市民に知らされていく。ストーカ炉はいままでの一般的な焼却炉であり、ガスをつくるプラントへ送り、焼却ごみを溶かした金属とスラグという物質を取り出す技術で、最終処分となる灰の量が少なく、ダイオキシンも抑えることができるというふれこみである。

しかしシャフト炉は、高温にするためコークスを使い、休むことなく燃やし続けなくてはならない。また、スラグは路盤材として販売もできることだが、果たして本当に安全なものだろうか。

この先、私たちはごみを焼却するためのために、コークスを何十年も燃やし続けるのであろうか。

鴨川市 今西徳之

シャフト炉とはどんな炉なのか
安房広域市町村圏事務組合が建設計画を進めている広域ごみ処理場に設置する炉が、シャフト炉に決まりました。

シャフト炉については、房日新聞(6月16日)や、だん暖たてやま(7月15日号)に載っていますので、大体の人が知っているかと思いましたが、意外に知られていないのです。また、ごみ処理場が平成33年に完成し、それに合わせたごみの分別方法(案)が、だん暖たてやま(9月1日号)に掲載されています。

ごみ処理は市民にとって重要な事です。知らないことは、市民にしっかりと伝えるべきです。知らないことは、市民にしっかりと伝えるべきです。知らないことは、市民にしっかりと伝えるべきです。

館山市 三上英男

